



Title	教育臨床心理学・臨床教育学の研究と教育：北大教育学部の歴史から
Author(s)	間宮，正幸
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要，132，5-24
Issue Date	2018-08-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.132.5
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71460
Type	departmental bulletin paper
File Information	020-1882-1669-132.pdf



教育臨床心理学・臨床教育学の研究と教育

ー北大教育学部の歴史からー

間 宮 正 幸*

Studies and Education in the field of Clinical Psychology for Education and Clinical Research on Human Development and Education: Tracing back the History to our Faculty of Education in Hokkaido University

Masayuki MAMIYA

【要旨】 北大教育学部創設期の1952（昭和27）年，教育衛生講座と特殊教育講座が設置され，まず，奥田三郎教授が教育衛生講座を担当することになった。教育衛生講座は，学校衛生，精神衛生，衛生教育によって構成され，特殊教育講座と合わさって研究・教育が行われた。その後，衛生教育領域は健康教育として独自に歩みをすすめた。1993（平成5）年に，教育臨床心理学講座が設置されたことにより，学校衛生と精神衛生の領域は，不登校，いじめ，児童虐待，人間発達援助職の自己教育など，学校教育，家族支援，地域支援の諸問題に関わる教育臨床心理学・臨床教育学と称して研究・教育が進展した。さらに，2011（平成23）年の大学院組織改編により，臨床心理士有資格教員を配置する臨床心理学講座が設置され臨床心理士養成がはじまった。しかし，2017（平成29）年，北大の教員人件費ポイント削減により教育臨床心理学担当教員人事が凍結され，学部講義「教育臨床心理学」は廃止された。

【キーワード】 教育衛生講座・特殊教育講座，奥田三郎教授，教育臨床心理学講座，大学院臨床心理学講座，人間発達援助の専門職養成

Key Words

course of educational hygiene and special education, first professor M.D. Saburo Okuda, course of clinical psychology for education, course of clinical psychology in graduate school, education and training for helping professionals

はじめに

2016（平成28）年8月22日，北海道大学は臨時部局長等連絡会議を招集し，教授にして205名ぶんに相当する教員人件費ポイント削減案を提案した。主たる根拠は国の運営交付金削減等に

* 北海道大学名誉教授
DOI : 10.14943/b.edu.132.5

よる約55億円の自己負担の増加による。その後、12月に学長選挙が行われ新学長の案により削減の比率は変わったものの、この時点では有無をいわさぬ提案であったため、直後の9月2日開催の大学院教育学研究院教授会は「教育臨床心理学」担当教員の人事を凍結した。これはすなわち、この年度をもって定年退職を迎えた筆者の後任者の採用がなくなったことを意味し、臨床心理士養成大学院としての研究・教育を担う有資格教員は減員となった。同時に、1993（平成5）年11月教授会での「教育臨床心理学講座」（当時）教授の決定の時から四半世紀にわたって横湯園子（在職期間：1993年度～1998年度）、田中孝彦（1995年度～2002年度）、田中康雄（2004年度～2011年度）、間宮正幸（1999年度～2016年度）と継承されてきた教育学部・教育学研究科・教育学院における子ども・若者の教育と自立支援にかかわる研究・教育の中心的担い手のひとりを失うことでもあった。

2015（平成27）年4月から、大学院で新カリキュラムが採用されゼミも改編されたことに伴い、1998（平成10）年から教育臨床心理学の研究・教育の一翼を担ってきた松田康子教員は「障害者臨床心理学ゼミ」を立ちあげた。ゆえに、今後は渡辺誠教員が「教育臨床心理学ゼミ」をひとりで担当していくことになるが、渡辺は大学院臨床心理学講座設置時に「臨床心理査定」を主担当とする人事によって着任したという経過があり、心理療法、心的外傷、学生相談、集団精神療法に関する研究を専門としている。かくして、「教育臨床心理学研究グループ」（1993年度～1999年度）、「教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ」（2000年～2007年度）、「教育臨床心理学ゼミ」（2008年度～現在）というふうに、組織再編の度に名称を変えて継続してきたのであるが、研究・教育の特色のひとつであった「子ども・若者の研究」という点については筆者の退職をもって一区切りをつけざるをえなくなった。また、2017（平成29）年度から学部の授業科目「教育臨床心理学」は廃止されている。

1990年代に、時代に要請されてようやく開講した学問領域が、国の交付金の削減に端を発してかかる事態を迎えたのであるから遺憾にたえない。今後、教育学部・教育学院の全体として成長・発達に困難を抱える子ども・若者の教育と自立支援に関する臨床心理学的・臨床教育学的研究が継承・発展することを筆者は心から願うものである。

本紀要は職務満了教員の退職記念特集号として発刊される。慣例に従うならばその体をなす編集が行われるのであろう。しかし、かかる事態に鑑みて、教育臨床心理学講座設置後の大部分を占める18年にわたって在職した筆者には、これまでの研究・教育の活動を総括しておく義務があると考え本稿を寄せた。この機会を逃せば資料の散逸が進み、ますます参照することがむずかしくなるに違いない。

遇れば、北大教育学部における教育臨床心理学・臨床教育学の研究・教育組織の誕生・維持・発展は、戦前の遺産を引き継いで、艱難辛苦を乗り越えてようやく誕生したのである。私たちは、そのことを肝に銘じて忘れないでいきたい。

1. 教育臨床心理学講座の設置

1-1. 設置までに

大学院臨床心理学講座の設置

重点化された大学院では名称の変遷があったものの学部では一貫して教育心理学系「教育臨床心理学ゼミ」と称し、通称「北大教臨」と親しまれてきた。この教育組織としての研究グループ（ゼミ）で行われてきた教育臨床心理学・臨床教育学の研究・教育を北大教育学部の歴史のなかで総括することが本稿の主たる課題である。

まず、2011（平成23）年4月に、久しく望まれてきた臨床心理士養成コースの新設に伴う大学院の教育組織再編が行われて臨床心理学講座が設置されたことを振り返る。そのことから稿を起こしたい。

この時、新講座に臨床心理士資格をもつ5名の教員（室橋春光・田中康雄・間宮正幸・松田康子・渡辺誠）が配置された。筆者の脳裏には、この新講座設置の由来は新制北海道大学教育学部教育衛生講座・特殊教育講座に遡るとの考えがひらめいた。室橋は北大教育学部特殊教育講座出身で特別支援教育領域の研究者であり伝統の基礎研究と臨床研究を行っていた。松田と渡辺は同じく特殊教育講座を出自としつつも創設期の教育衛生講座における精神衛生領域を担う研究者。田中は発達障害等の診療と研究において該博な知識と経験を有する精神科医として全国的に活躍していた。筆者は総合病院小児科治療教育部及び精神科の心理臨床経験をもち、北大教育学部の先達城戸幡太郎、留岡清男、奥田三郎に関する歴史的研究を行いつつ生活指導研究に関心を寄せていた。新講座はそういう5名の教員で構成されたのである。教員定数の制限から心理学研究に古い歴史を有する大学院としてはもっとも遅い臨床心理士養成コースの認可となったが、「かくしてこの大学院講座は創られた」という感慨があった。それまでの長い研究・教育の積み重ねがあってスタートした「北大の臨床心理学講座」と考えた。

以下に、その、議論の積み重ねの足跡をたどる。

1999（平成11）年4月、筆者は横湯と交代するかたちで教育臨床心理学講座助教授として着任した。しかし、その際も、その後も、特殊教育講座と教育臨床心理学講座は源を同じくすると発想した言葉を一度も耳にした記憶がない。

むしろ、その年をもって終えることになった小講座時代は、いずれの講座も「煙突型」と称される互いに交流の乏しい独立した雰囲気があった。教授の横湯は院内学級担当中学校教員の経験がある教育臨床の研究者、助教授の田中は日本の子ども研究を行う気鋭の教育学・教育思想の研究者、助手を務めた伊藤亜矢子は学校臨床心理学を専門としていた。ゆえに、教育臨床心理学講座は「学校における教育臨床研究の講座」とみなされていた。実際、横湯と田中は学問的な専門領域として「臨床教育学」を志向しつつ全国的に活躍しており、2011（平成23）年に設立された日本臨床教育学会で主軸を担う。当時のゼミの構成員は、それぞれ、教育臨床心理学と臨床教育学の学問的定義付けと位置関係を理解することに自前の努力を必要とした。

一方、特殊教育講座、もうひとつの通称「特殊ゼミ」は、「現在学部の研究体制は講座制から研究グループ制に移行しつつあるが、すでに発足した研究グループ」（『学生便覧』昭和45年）のひとつとして、1970（昭和45）年度から1993年度まで教育組織としては「臨床心理学研究グループ」と称していた。このことは、今ではまったく忘れられているように思われるがそれまでの歴史的

経過がある。過去の『学生便覧』などを参照してみると「臨床心理学研究グループ」と称した時期と「臨床心理研究グループ」と称した時期（1988年度～1990年度）がある。それは学部全体での変遷に伴っている。1994（平成6）年に教育組織として「教育臨床心理学研究グループ」ゼミが立ち上がったときに、このゼミは「特殊教育・臨床心理学研究グループ」になった。

この講座は、奥田三郎（在職期間：1949年度～1966年度）、狩野陽（1956年度～1991年度）、そして、特殊教育講座出身の北島象司（1962年度～1991年度）、諸富隆（1992年度～2001年度）、室橋春光（2000年度～2014年度）の3氏が教授を務めた。教育臨床心理学講座が新設された時点では、諸富教授、古塚孝助教授（在職期間：1976年度～1998年度）、片山順一助手（1991年度～2008年度）によって構成されていた。先述のごとく、すでに1970（昭和45）年から教育組織としては「臨床心理学研究グループ」と称しており「適応障害の診断と治療の基礎研究」や「発達障害・適応障害の基礎機構」に関する研究・教育を研究テーマに掲げて、主に障害児の発達神経心理学的研究と事象関連電位を中心とする生理学的な方法による人間研究を行っていたのである。

本稿の後半で内容にふれるが、教育臨床心理学講座設置直後の「教育臨床心理学研究グループ」と、この当時の「特殊教育・臨床心理学研究グループ」の研究・教育の内容を比較するのであれば、差異化を論ずることはあっても「源流をたどれば同じくする」という発想は生じないのも無理はなかった。大学院「特殊教育ゼミ」に在籍した市澤豊の修士論文「戦後北海道の精神遅滞児教育成立期における特殊教育論—北海道大学教育学部『特殊教育講座』の成立過程の検討と城戸構想試論」が提出されるまでは、学部創設期資料がはなはだ入手困難であったという点からも創設期の教育衛生講座が話題になる機会は乏しかったろう⁽¹⁾。

しかし、以下に述べるように、このふたつの講座は元をさぐればところを同じくし、北大教育学部の心理学・教育学が何を研究・教育の目的としてきたのかを考察する際の拠り所になると筆者は考える。

教育臨床心理学講座の誕生

1993（平成5）年2月19日の教授会（山田定市学部長）において教育臨床心理学講座の教授人事にかかる人事選考委員会が設置され、同年4月23日の教授会で「教官公募」（案）が承認された。そして、審査の結果、同年11月12日の教授会で初代教授が選出された⁽²⁾。横湯は、1994年の2月に着任して4月からの教育臨床心理学講座開設の準備を行った。4月、学部で「教育臨床心理学ゼミ」が始まり、後期には講義「教育臨床心理学」が開講されている。1995年4月、助手として伊藤が、同年7月には、助教授として田中が着任している。

ここに至るまでに、山田学部長のもと、1992（平成4）年7月24日の臨時教授会開催以後、ほぼ毎回の教授会（当時は月2回）において「大学院整備構想について」と題する報告があり議論が行われた。教授会に提案される前には研究計画委員会、概算要求推進委員会等での度重なる議論があった。この時（7月24日）の臨時教授会における研究計画委員会（小林、佐藤、西本の署名入）からの報告が重要である。以下に、教育臨床心理学講座誕生にかかわる議論を関係する部分のみ、一部ワープロ書き、ほかは手書きのメモ書きふうのレジュメから抜粋する。

1992（平成4）年7月24日の臨時教授会メモ

○発達人間学分野

教育臨床心理学関係，人格形成への適応障害論的接近

○臨床教育学分野ないし発達教育学分野

教育保障論関係，青少年教育論関係，対人関係論

○学校生活過程論分野

学校教育場面の臨床心理学的探求，教育相談論，カウンセリングの理論と実際，学校/生徒における教育福祉の諸問題，生徒と集団論/生活指導論の関係，生徒/生徒集団の価値志向の現状と変容，障害児臨床教育論，障害児の診断・治療，臨床心理学的研究グループ

この、1992（平成4）年7月24日の臨時教授会での議論が「教育臨床心理学」の初出の時とみなせる。「発達人間学分野」の欄に、「教育臨床心理学関係，人格形成への適応障害論的接近」のメモがある。1962年に、城戸幡太郎が、論文「これからの教育研究のあり方―臨床教育学の研究を提唱する」で掲げた「臨床教育学」の名称がここで大きくりの「臨床教育学分野ないし発達教育学」として登場しているのが注目される⁽³⁾。「学校生活過程論分野」では、「学校教育場面の臨床心理学的探求，教育相談論，カウンセリングの理論と実際，生活指導論」等が並ぶ。「大学院整備構想について」というテーマのもと，教授会での度重なる議論のなかで，一時は「学校教育臨床心理学講座の申請」の文字も見えたが，最終的には「発達人間学分野」に「教育臨床心理学講座」を置くということになり申請して認可された。そして，先述のように，1993（平成5）年2月から「教官」の人事選考が始まった。翌年の「大学院教育学研究科改革構想の若干の見直しについて（第二読会）」等の議論を経て，4大講座のなかの「人間発達大講座」の内容として「教育臨床心理学」，「教育相談論」が入ることになった。

こうした教授会議論を経て新たに教育臨床心理学講座設置を申請した背景には，1980年代に急速に社会問題化してきた不登校，いじめ，学校暴力などの教育現場の諸問題に関する研究が求められているという時代の要請があったことがうかがえる。ただし，この年代になって急に浮上したのではない。伏線は創設期から敷かれていたのである。

1999（平成11）年，筆者の着任時，教育臨床心理学講座関連の企画・立案・人事を中心的に進めた諸富隆元特殊教育講座教授から直接示された資料には，「人間の発達と学習に伴う学校および家族における適応とその障害の心理学的体系化と，基礎的な行動の解明に関する研究教育を行うものである」（1993年）とある。これは教育臨床心理学講座設置趣旨の文言である。「基礎的な行動の解明」が大学における研究の課題として位置づいている。

これらの議論の経過を正確に把握することには困難を伴うが，教授会資料から一定の推測は可能である。高等継続教育の研究・教育とあわせて「次はこの研究領域だ」というような合意形成があったと考えられる。2000（平成12）年4月の大学院重点化に際し，結局，教育臨床心理学(小)講座は「発達人間学分野」または「人間発達大講座」としてではなく「教育臨床大講座」の名称のもとに組み込まれた。

こうして，教育臨床心理学講座設置までの議論の後をたどってみると，初の人事では学校教育の臨床心理学的研究において実績のある人材が望まれたことがわかる。在職中，筆者は「北大教育学部の五円玉現象」という言葉を何度も聞いた。今，その言葉の意味を思い起こす⁽⁴⁾。後にふれるように，学部創設期の奥田教授の教育衛生講座では，まずは「学校衛生」に関する研究・

教育の内容が想定されていたのであるから教育臨床心理学講座の設置は北大教育学部における研究・教育体制にかかる議論の一到達点ということになる。

1-2. 創設期の教育衛生講座・特殊教育講座

教育衛生講座

こうして、1993年設置の教育臨床心理学講座は、直線的ではないにしても教育学部創設期の1952年に設置された教育衛生講座の延長上に位置するのではないかと筆者は考えた。ところが、それを資料で確認するのは容易ではなかった。着任以来、筆者も独自の調査を試みたが資料の探索は甚だむずかしいものだった。

しかし、今ではかかる指摘を行うための優れた先行研究がある。市澤豊著『戦後障害児教育実践史』の第2章「北大教育学部特殊教育講座の成立と役割」がそれで、以下の論述の多くは市澤の研究による。ここに謝意を表しておきたい⁽⁵⁾。長きにわたって北海道で特別支援教育の実践家として活躍した市澤は、定年退職後に北海道大学大学院教育学研究科に入学。そして、先述のように、平成10年度に修士論文を提出している。本書は、その後も旺盛な研究を続けて関連する領域の新事実を明らかにしてまとめられたものである。以下での引用文末のカッコ内の頁数は本書の該当箇所を示す。

まず、次のような指摘が重要である。

北海道大学教育学部の学科乃至講座の特色は、その講座構成や講座内容にあるだけでなく、文部省の認可を得ないままに、学部独自の運営で経営されていたことなどがあげられる。すなわち、構想の実現には認可に頼らずに、大学内部の運営操作に頼る方法である。従って、講座の成立時期を特定することは至難となる。(p.282)

この一文に出会った時、筆者は、講座設置に関してまったく整理がつかないできたことに合点がいく思いがした。文書資料ではなかなか判明しないことが多すぎるからである。さりとて、当時を語ることができる方に出会うこともかなわない⁽⁶⁾。

そこで、教育衛生講座と特殊教育講座の設置・誕生の背景には次のような実話があることを最初に理解しておくのがよいだろう。

奥田三郎に関する資料を保管・管理してきた市澤によると⁽⁷⁾、1950年1月6日消印の、東京世田谷住所の城戸幡太郎から遠軽北海道家庭学校の奥田にあてた手紙が残されており、そこには、城戸が北大教育学部長に就任するので奥田には「治療教育学」ではなく「教育衛生講座」を担当してほしいこと、そして「特殊教育講座」は三木安正を教授に就けたいとの記載があるという(p.281)。1949年5月31日に認可されることになった「教育学部設置認可申請書」の第一部教育学科案には「教育衛生」と「特殊教育」があった。それが認可されたので半年後に城戸は奥田に手紙を送ったのである。しかし、1951(昭和26)年、三木は東京大学教育学部助教授に就任するという経過があって、この人事がむずかしくなり、奥田が「教育衛生」と「特殊教育」を合わせて担当することになった。「教育衛生」の講座内容には、学校衛生、精神衛生、衛生教育が含まれ、「特殊教育」の講座内容には、虚弱教育、精神薄弱児教育、盲聾啞教育、精神異常児教育、英才教育が含まれていた。市澤の『戦後障害児教育実践史』には「表-1. 北海道大学教育学部特

特殊教育講座沿革資料」(p.276～p.281)と「表－3. 教育衛生, 特殊教育講座名称, 講座内容の変遷」(p.283)がある。後者をここに掲載する。この表がどれほどの労作か今の筆者にはよくわかる。

なお, 以下の奥田らの文献からの引用においては当時の記録をそのまま記述するので現在ではふさわしくない表現があることをご容赦いただきたい。

(市澤, 2010, p.283. 表3. 教育衛生, 特殊教育講座名称, 講座内容の変遷, 一部省略)

年月日	会議等	講座等の構成内容
1948. 8.19	教育学部設置要綱	10講座制10講座 教育方法第四講座 特殊教育
8.23	第4回学部小委員会	9講座制9講座 教育方法第三講座 特殊教育
1949. 1. 4 1949. 3.28	基準設置対策委員会	1学科6科11+ α 講座(城戸案) 教育学科4講座, 体育科2講座, 芸能科1講座, 職業科, 技術科, 家政科(師範合併)
	学部設置認可申請書	3学科制33講座 第1部教育学科10講座, 教育衛生, 特殊教育 第2部体育学科4講座, 芸術学科4講座, 職業学科4講座, 家政学科5講座, 第3部学芸科4講座(内容記載なし)
1950. 3.16	文部省内諾	1学科2科(予算措置なし, 学内予算) 教育学科10講座 教育衛生, 特殊教育 体育科4講座, 音楽科4講座
8.22	教授会	学科制でなく専攻制に 教育学科, 養護科 , 体育科, 音楽科
9.29	現況調査	教育学科10講座 教育衛生, 特殊教育(虚弱児教育, 精神薄弱児教育, 盲聾教育, 養護教育, 英才教育) 体育学科4講座, 音楽科3講座
1951. 10. 9	改組拡充認可申請書	6科17講座 教育学科6講座, 体育学科3講座, 音楽科2講座, 職業学科2講座, 家政学科2講座, 養護学科(教育衛生, 特殊教育)
1952. 4. 5	教育学部学報第1号	養護科研究室 教育衛生: 学校衛生, 精神衛生, 衛生教育 特殊教育: 精神薄弱, 性行不良, 盲, 聾, 肢体不自由, 教育学部教育課程 養護教育専攻 第一類(養護科教育専攻) 第二類(養護学校教育専攻)
1953. 4.10	教授会城戸学部長案	6講座 教育史学, 教育計画, 社会教育, 産業教育, 生活教育, 特殊教育 9研究室 教育衛生教育

1952年4月、教育衛生講座と特殊教育講座が開講された。市澤は「特殊教育講座及び教育衛生講座は、学部創設時から講座の名称に変化はあったものの、その構成や内容が変わることなく一貫して継続されている数少ない講座の一つであることが分かる。そこで本稿では特殊教育と教育衛生を統合した名称として『特殊教育講座』を使用する」(p.284)と記している。本来なら2名の教授、場合によっては奥田三郎と三木安正でそれぞれ担当するかもしれないところをまず教授としては奥田がひとりで担い、次に山本普助手が、後に木村謙二助教授が着任した。こうして1952年に教官が3名揃った。「1952年度講座構成案」(奥田三郎資料メモ：市澤の保管資料、p.285)によれば、「教育衛生」(学校衛生、精神衛生、衛生教育)の担当は奥田で、「特殊教育」(盲ろう一あ教育、虚弱児教育、精薄教育、矯正教育)の担当は木村となっている。

次の「養護科教室 研究室だより」がこの頃の講座の雰囲気を与えている⁽⁸⁾。

養護科というのは、余りパツとしない名前だが、内容は、教育衛生と特殊教育の二つを含んでいる。教育衛生は、学校衛生、精神衛生、衛生教育を主軸とした公衆保健衛生の研究を主にし、特殊教育は、精神薄弱、所謂性行不良、盲、聾、肢体不自由等、正常の普通教育とは別な教育を必要とする方面の研究を行っている。(中略)二七年に於いては、児童外来相談(チャイルド・クリニック)の開設、保育実験観察室の新営、簡単な衛生実験室の整備に着手し、調査研究としては、精神薄弱並びに教護、保護少年の社会的予後を少々大がかりに調査研究すると共に、特殊教育研究会を充実させて行きたいと思っている。学校衛生が、兎角口頭禅になり勝ちな現状を少し分析的にあきらかにし、学校の保健教育に些小の貢献を致したいと思っている。

以上は、現状に即しての差当つての実行可能な案であるが、由来、教育理論及び技術大変革や躍進は、特殊教育方面から出て来ていることは、ベスタロッツ等々を挙げる迄もない。この意味で描く夢は大きいが、これは暫く伏せておくこととする。学校衛生についても同様で、日本の衛生の社会的水準の低いのを、教育的に急速に向上せしめたいというのが、吾々の一つの念願である。医者に非ざる教育者が、本当に衛生の概念を獲得し、教育方法を通じてこの方面で多数、活発に動き得る原動力として働きを果たすことが、吾々に課せられた任務の一つだと考えている。(原文のママ)。

また、同じく市澤が保管する「奥田三郎資料メモ(原文のまま)」によると「教育衛生学科の目的」は以下のように記載されているという。

本学科は、心身両面に亘る健康の保持、増進並びに心身の欠陥者に関する教育科学的研究並びに心身に欠陥を有するもので、を主眼とする。而して、特に、精神衛生部門として、所謂特殊教育学を包含するものとする。(教員免許としては、保健科、養護、保母養成可能とする)」(p.286)

市澤は「このことからすると、『特殊教育講座』は教育衛生講座と特殊教育講座の二講座から構成されているが、実際には奥田三郎主任教授の教育衛生講座に特殊教育講座が包含されており、時には『養護教育学科』、『養護教育講座』の名称のもとに運営されていたと思われる。また、『養護科研究室』、『教育衛生研究室』などがあり定着していない。専攻は教育科学研究にあるが、

免許状取得をも含み、保健科、養護教諭、養護学校教諭免許状や保母資格の取得も可能であったことになる」(p.286)としている。

1949年3月の「学部設置認可申請書」に初登場する「教育衛生」については歴史的な理解が必要であろう。戦前、1930年代に、奥田は多くの論文を著わしているが、そこに「教育衛生」や「学校衛生」なる言葉を直接に見出すことはむずかしい。ただし、日本学校保健学会編『日本学校保健学会50年史』(2004年)によれば、明治・大正期に「学校衛生」に関する書物が少なくとも36点刊行されている⁽⁹⁾。1932年発行『岩波講座 教育科学』には岩原拓の「学校衛生」が収録され、また、城戸幡太郎ほか編『教育学辞典 I』(1936年)では、岩原が執筆した詳しい項目「学校衛生」があるので、奥田がこれらに目を通した可能性は高い⁽¹⁰⁾。岩原は、1947(昭和22)年、日本学校衛生会理事長になる。この辞典項目に、学校衛生は「一に教育衛生educational hygieneとも謂はれる」とある。学校衛生は実に幅が広い。奥田が、この岩原らの著述を参照していないとは考えられず、「教育衛生」は岩原が記した広義の「学校衛生」に精神衛生学を加えた領域に該当するように思われる。しかし、残念ながら、北大教育学部に「教育衛生講座」を設置することになった背景事情を示す資料が見つからない。それにしても、われわれはやはり時代背景をつかむ必要があるだろう。「敗戦による破壊は学校保健の再興・充実を強く要求した」(「戦後学校保健への期待」『日本学校保健学会50年史』)に違いない。

ただ、ここで、筆者は、日本の養生思想を教育学的に研究してきた瀧澤利行の次の指摘が重要であるとする⁽¹¹⁾。瀧澤は、茨城大学大学院教育学研究科養護教育専修に所属する衛生学、公衆衛生学の研究者である。

江戸期から明治へ、「養生」から「衛生へ」

明治新政府が打ち出したさまざまな政策のなかでも、海外からの急性伝染病の侵入を防ぐことと、国内での蔓延を防止することは緊急性の高いものであった。「太政官制」の下で文部省に医務課が置かれたのが明治5年(1872)である。翌年、医務局と改称され、さらに明治8年には内務局に移管され、翌年「衛生局」と改称される。この「衛生」こそ、養生に代わる明治以降の象徴的概念であった。

明治24年に、文部省に「学校衛生事項取調嘱託」三島通良がいて、明治29年には「文部省学校衛生顧問及び学校衛生主事の配置」などと使用されていた。こうして「衛生」概念は明治になってそれまでの「養生」にとって代わって使用されることになった。だが、それは文明開化の世相に伴う「象徴的概念」である。むしろ、そうであれば、わが国における明治期までの養生論とは何であったかを知ることが必要である。少なくとも元来は「急性伝染病の侵入を防ぐ」ことにとって代わるようなものではなかったとの認識が必要である。これも瀧澤の考察を参照する⁽¹²⁾。

近世後期養生論の「総合的人間生活論化」「人間形成論化」の傾向は、「健康」と「人間形成」の関係が、いかに歴史的に深いものであったかを物語っている。(中略)近世養生論における「養生」の概念と実体、言い換えれば「健康の生活化」の思想は、健康・生活・人間存在の三者を総合的・有機的、かつ発達的に把握するという日本独自の思想の一つのあり方を提示しているとみることができる。「養生」の概念と思想は、日本人にとって、思想と文化の構造を解明する際の基本的概念であると考えざるをえないとともに、健康に

についての文化としての「養生」概念を「生活原理」化し、新たな社会創造、文化創造の基盤としていくことの再考が切にまつられる。

瀧澤は、文化・文政期までの養生論を検討して「養生がまさしく『修道』すなわち人間の生きるあり方そのものであることを説くとともに、また養生のあり方も人間の生き方はもとより社会や集団の現実や方向と離れてはあり得ない」というのである⁽¹³⁾。この文脈に奥田の「衛生」概念を重ねるならば、今日のエデュケーション臨床心理学・臨床教育学の研究・教育にとっても実に意義深い言葉であることが理解されてくる⁽¹⁴⁾。「教育衛生は、学校衛生、精神衛生、衛生教育を主軸とした公衆保健衛生の研究を主にし」(『養護科教室 研究室だより』)とあるにしても、ここでいう「公衆保健衛生の研究」、すなわち、奥田の構想にいう「衛生」は、瀧澤が指摘する養生思想の発展的な内容さえも包含しているように思われる。1930年代から、子どもや障害者の生活能力の形成と社会的治療教育を説いていた精神科医の奥田にとって、「衛生」は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのドイツ語や英語の「社会衛生」(soziale Hygiene, social hygiene)あるいは学校衛生(school hygiene)に学びながらも、ただに身体 の健康保全を意味するだけではなかったろう。

再び引くが、「1952年年度講座構成案」(奥田三郎資料メモ, p.285)によれば、養護学科の「教育衛生」の授業(学校衛生, 精神衛生, 衛生教育)は奥田が担当し、「特殊教育」の授業(盲ろう-あ教育, 虚弱児教育, 精薄教育, 矯正教育)は木村謙二が担当するという手筈であった。さらに、「健康教育」「体育医学」(保健科学)は、本田君, との記載がある。この三領域が奥田の「衛生」概念の新しい展開においては分かちがたく結びついていたと察せられる。北大教育学部では、ここでの「健康教育」は現在の健康教育論講座につながる研究・教育であり、体制が一早く整い、そこには医師が赴任してきたという経過がある。

図書室に保存されていないので筆者は未見であるが、市澤によれば、1955年に発刊された『北海道大学教育学部概要』(昭和31年度版)の「研究と指導の現況」には次の紹介があるという。

教育衛生教育に関する研究

特殊教育と教育衛生との研究指導がこの領域での仕事である。学部講義のエデュケーション心理学, 精神衛生, 保健衛生が骨子となって、これらの実習の場として、教育相談クリニック, 精神病院実習を行い、北大幼稚園(本研究室奥田教授が主事)をてきぎ利用している。

対外活動としては、特殊教育研究会を組織して、全道の特教関係者の定期的研究会を開き、機関誌も出している。なお、学外の児童福祉(児童相談所, 精薄・養護・教護・肢体不自由児施設等)や社会福祉, また、矯正保護(鑑別所, 更生保護委員会, 保護司, 民生委員等)事業とも、ふんだんに連絡して指導研究に当たっている。(p.288)

1956年の時点でのこうした活動紹介を参照すると、後の北大教育学部・研究科が時代を睨みながら、諸制限のなかでこの方向性を意識しつつ少しずつ歩みを進めたことが理解されてくる。少なくとも筆者は、赴任後、このような研究・教育を行うことが北大における自分の任務だと意識してきた。それゆえに、奥田が如何にしてこのような着想をもつに至ったか、北大着任以前の業績を振り返っておきたいのである。

1－3．奥田三郎の教育衛生思想

奥田の精神医学と治療教育学

先頃、筆者は教育学研究院附属臨床心理発達相談室紀要に「時代に応える臨床心理発達相談－日本の先達、城戸・留岡・奥田からの伝言－」を寄稿した⁽¹⁵⁾。そこで、1930年代に精神科医の奥田が子どもや障害者の「生活能力の形成」をいち早く論じた先達と位置づけた。また、1967年の最終講義において、自身を「40年間の臨床心理学的立場」と評していたことを紹介した⁽¹⁶⁾。そこでも引用・紹介したが、大泉溥編纂『日本心理学者事典』（2003年）に奥田の略歴と業績が詳しく記載されているので一部転載する。

奥田は、1903年、北海道旭川市に生まれた。第一高等学校を卒業。1922（大正11）年に東京帝国大学文学部哲学科に入学したが、1年足らずで心理学科に転じた。1925（大正14）年卒業。卒論は「他我の認識について」であった。私立巣鴨中学校の教員となるも、すぐに、松沢病院心理室に勤務。1926（大正15）年、東京慈恵会医科大学医学部入学。1929（昭和4）年、医科大学学生身分ながら法政大学児童研究所の設立で所員として参加。1931（昭和6）年に卒業。東京帝国大学附属病院で1年間研修し、1932（昭和7）年に松沢病院に医局員として勤務し、1946年3月まで在職した。1932年から児玉昌（こだま・さかゑ）の後を受けて小金井治療教育所（1935年に小金井学園と改称）を運営。

奥田の略歴と業績を見るならば、すぐに、人々は哲学と医学の学修の影響の大きさと臨床現場に寄り添う実践家としての立ち位置のゆるぎなさ気づくであろう。岩波講座『教育科学』（1933年）の「精神治療学」、城戸幡太郎編『教育学辞典Ⅲ』（1938年）に寄稿した「治療教育学」は、当時の独仏英米の先進事情に詳しくふれられていて今もって高い水準の記述である。「治療教育学」の項目では、フランスの精神病理学者と教育家の協力連携が半頁にわたって記述されている。筆者は、北大着任後の21世紀になって、フランス心理学史の研究を行うなかでこのような歴史的事情をようやく知ったのだが、1938年に、奥田によってすでにこれが記述されていたことに驚きを禁じえなかった。一層の驚きは、その当時から、奥田は、欧米の状況の紹介者だったというだけではなく、目の前子どもたちと生きて、子どもたちに向き合って「生活能力」の形成を考えていたことである。

大泉溥編『日本の子ども研究』第8巻『奥田三郎の子ども研究と治療教育方法論』に貴重な資料が掲載されている⁽¹⁷⁾。本稿では『第8巻』と略称する。編集構成は以下のようである。

第8巻目次

第Ⅰ部 戦前の心理学・精神医学

第Ⅱ部 戦前・戦中の知的発達障害児処遇論

第Ⅲ部 戦後の心理学・精神衛生と特殊教育

第Ⅳ部 通信教育テキスト

第Ⅴ部 北大幼児園の関係資料と『北大教育学部特殊教育研究会ニュース』より

第Ⅵ部 留岡清男と家庭学校のこと

第Ⅶ部 小金井学園の関係資料

第1章 小金井学園の関係論文・回顧録など

第2章 小金井学園の記録

奥田三郎年譜

『第8巻』に、奥田が関わるもっとも古い資料として「小金井学園の関係資料」のなかの「法政大学附属児童研究所設立趣意書」（昭和4年）がある。これは、署名している奥田がまだ東京慈恵医科大学学生の時、東京大学文学部卒業生であるので「児童研究部 文学士奥田三郎」とある。「家庭の方々へ」と題する案内は今日でも参照に値するだろう。

次に、1931（昭和6）年の、法政大学優生学研究所付属・小金井治療教育所の「要旨」を見ると、設立目的を「精神の発達が普通でない児童を教育し治療し保護することを以て目的と致します。精神発達異常の中でも知能の発達の遅れた児童を主としますが性格異常児も場合により御預り致します。年齢は大体6才乃至18才でそれ以下の者又は以上の者でも見込ある者は御引受けすることがあります」としている。この時の顧問のひとりの奥田の所属は府立松澤病院で、まだ医師ではなく心理職であった。また、1935（昭和10）年の「小金井学園々則」第1条には、「本学園ハ智能ノ発達ノ遅レタル児童及ビ軽度ノ性格異常児童ヲ教育、治療、保護スルヲ以て目的トシ、併セテ児童ノ教育相談並ビニ鑑別ヲナス」とある。この時は、幹事としての奥田三郎の名前があり医学士文学士となっている。医師を交えての実践は、今日でいえば児童青年精神科医療の活動にあたるが、当時は、せいぜい、医師もまじえた外来相談と施設教育という限界があった。

そうではあるにせよ、かかる高い理念のもとに進取の気性に富んだ人々の集まりに参加・結果した若き奥田がいた。ゆえに、後に北大教育学部に赴任した際には大学に附属の「チャイルド・クリニック」を設置しようとしたのは当然の思いだったろう。これまでもたびたび紹介してきたが奥田のメッセージをまたも引用したい。それは、「北大幼稚園が開かれた」という一文で、教育衛生講座・特殊教育講座が設置された1952年のものである⁽¹⁸⁾。

11月15日、七五三の佳日に、北大幼稚園が開園式を挙げた。本園は、その名の通り、保育所でもなく、幼稚園でもない。この中間に行くものである。目的は、幼児教育の研究を主とし、併せて地域社会の要望に応じ、研究と実践をマッチさせて、些か貢献しようという点にある。元来は、教育衛生研究室の仕事の一つとしてチャイルド・クリニックを設け、同時に特殊児童を主とした保育教育をやろうとの意図から出たのであるが、この準備を進めている間に、近隣社会からの要望が強く、今日にみる如く、忽ちにして120名程を取扱う幼稚園になったのである。従って、施設は甚だ不十分で、色々、難問題に当面している始末であり、第一の急務は、ホールの確保である。幼児教育の問題は、特殊児童に対する早期教育の問題も含めて、未解決の事項が山積している。これを、現実には置かれた条件下に於いて、一つ一つ解決して行こう、と努力している次第である。各方面の御支援を願いたい。（奥田）

北大幼稚園の開園は、城戸学部長の構想に由来するというより、実務家でもある奥田の教育衛生思想の具体化の一里塚と見ることができる。ここにいう「元来は、教育衛生研究室の仕事の一つとしてチャイルド・クリニックを設け、同時に特殊児童を主とした保育教育をやろうとの意図」とは、まさに教育衛生の研究・教育の実際の追及にほかならなかった。1966（昭和41）年、退官にあたっての最終講義でも「臨床心理実験室と保育実験室の必要性」を語っている。今日

ならば「臨床」のひとつで片づけられてしまうのだろうが、奥田の、時代を先取りする高い教育思想と実務能力に基づく実践であったということが再評価されるべきである。財政上の制限・後退が迫ってきた際に、大学は研究・教育をいかにして守り・構築するかが問われ続けてきたからである。

ただし、小さな部局における遠大な計画の一里塚ゆえ、その次の里程標はなかなか見えてこない。この奥田の構想は、1974年4月の教授会で承認され翌年度の概算要求となった『当面の学科・講座組織等の整備の方針について』で示された「人間発達学科」構想（発達心理学，臨床心理学，教育方法学，学習心理学，健康教育，体力科学）及び「幼児発達研究施設」構想に発展していく。この概算要求では、「幼児発達研究施設」に第1部門（正常児の発達），第2部門（障害児の発達・臨床）が位置づけられていた⁽¹⁹⁾。しかし、文部省との折衝は難航し、結局、1978年に第1部門のみに縮小されたかたちで「乳幼児発達臨床センター」として実現した。1976年に刊行された、北大医学部精神科諏訪望教授と北大教育学部三宅和夫教授編の著作『乳幼児の発達と精神衛生』があるが、実践的研究舞台としての乳幼児発達臨床センターが奥田構想とつながっていることはいうまでもなからう⁽²⁰⁾。ただし、予算の制限が厳しく、半年の間「実験保育」を行うに留まらざるをえず、「特殊児童に対する早期教育」は実現しなかった。

奥田そして三宅らの要求は、2006（平成18）年の《教育学研究院附属子ども発達研究センター》，2011年の《研究院附属臨床心理発達相談室》の開設へとつながっていく。

学校衛生と精神衛生

1930年代、奥田は「精神薄弱児の教育問題」（1937年）、「精神異常の児童」（1937年）、「精神薄弱児の生活能力」（1939年）などの論文を著わしている（以下の「教師の精神衛生」を除いていずれも『第8巻』所収）。戦後、北大に赴任後の作品には、北海道家庭学校の子どもたちについて調査した「問題児の社会的予後」（1955年）、「子どもの生活と精神衛生」（1957年）、「職業指導について」（1946年）などがある。子どもの生活や職業教育に関する問題を論じたものである。「精神治療学」（1933年）、「治療教育学」（1938年）および「治療教育法」（1938年）の辞典項目の3点は、今もって、わが国における臨床心理学と治療教育学の白眉というべき論考である。しかし、もう1本、奥田には「教師の精神衛生」がある。これまであまり知られる機会がなかった。北大教育科学研究会の会報と言われる『北海道大学教育学部・學報』第2号に掲載されている⁽²¹⁾。奥田の教育衛生講座の学校衛生と精神衛生の構想にかかわってくることがらである。

戦後、精神衛生が、教育部門で重要視されるに至り、それに伴って教師の精神衛生も色々の角度から問題となる様になった。昨夏北見市で催されたI・F・E・Lが、これに関する分科会を設け、今秋の北教組の研究大会で、教師の生活を困難ならしめている諸条件の吟味が行われた如き、この現れである。（中略）処が、吾々は、社会性に於いても生物学的存在としても、自分自身が決して完全円満には出来上がっていない。その上に、吾々の置かれている環境条件は、吾々の適応を阻むものが余りにも多いのみならず、現実の条件にそのまま適応するのが、果たして社会の生産性や創造性にプラスになるのか、否か、疑わしい場合すら縷々起こって来るのである。ここに、現在の教師の直面する精神衛生の諸問題が発生する根源があり、この解決には、精神医学を基調とする従来の精神衛生や、今日の実験心理学が扱う適応、不適応の理論のみでは、超えられないものがある。教育心理学や青年

心理学の通信教育レポートを拝見すると、精神衛生の基本的研究を、もうすこし実証的に進めて欲しいと思うと同時に、この方面での限界に対する認識をも明らかにして、より広く、より高い段階の視野を拓いて戴きたい、と痛感することが多い。吾々は、この意味に於いても、御互いに協力し合って、教育科学に一步の前進を致したいと念願しているのである。

(27.12.7)

しばらく経って、北大を退官する直前の、ラジオ講座テキスト『教育心理』（1965年）にも「第6章 教師の心理」があり、微に入り細を穿った記述がある⁽²²⁾。そこには「教師の精神衛生」の項もある。大学の卒業論文で「自我と他我」を論じた奥田の精神医学的結論は「自我的要求」と「社会的要求」の重要性を説くことだが、ここでも教師の自信と安定を強調している。先見の明というにふさわしい。筆者は、奥田の教育衛生思想と教育臨床心理学の共通点があるとしたら以下の引用の一文に凝縮されていると考える。

自我は社会の中で育ち、社会化されて出来上がったものですし、社会はまた個人から成立していて、自我の中に社会があり、社会の中に自我があるという関係になっているからです。しかし、自我的要求は、主に自信感に関係し、社会的要求は、主に安定感に関係していると考えると、自信とか、安定とか、よく使用される言葉が含む意味を理解し易い

こうして、奥田は「学校衛生」という場合に、教師の精神衛生をも含めて考えていた。先に、1992年7月24日の臨時教授会で議論のあった「学校生活過程論分野」は、「学校教育場面の臨床心理学的探求、教育相談論、カウンセリングの理論と実際、学校/生徒における教育福祉の諸問題、生徒と集団論/生活指導論の関係、生徒/生徒集団の価値志向の現状と変容、障害児臨床教育論、障害児の診断・治療、臨床心理学的研究グループ」が考慮されていたことを見たが、それだけではなく、教育臨床心理学には、奥田以来の、家族や教師の精神衛生研究への期待も含まれていたと考えるべきであろう。

2. 教育臨床心理学講座の研究・教育

2-1. 教育臨床心理学ゼミの歴史

上述のように、「特殊教育講座」は、教育組織として「臨床心理学研究グループ」、「特殊教育・臨床心理学研究グループ」と変遷してきた。「教育臨床心理学講座」は、大学院重点化後、一時期「教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ」と称した。それぞれの歴史的展開がある。筆者は、在職中、北大教育学部の授業「教育臨床心理学」において教育臨床心理学ゼミの変遷を以下のように紹介してきた。区分ごとの内容については2-2でふれる。

表 1 教育臨床心理学ゼミの研究・教育の変遷

時期区分	研究・教育の概要
第 1 期 (1993年度～ 1998年度)	・不登校、いじめ、学業不振など今日の子どもの諸問題に関する臨床的研究 ・育児不安、子どもの虐待など親の問題についての臨床的研究 ・燃えつき、過労などの教師の問題についての臨床的研究 ・スクールカウンセリングの問題と可能性についての実態調査と国際比較 ・教育臨床心理学の基礎的な概念についての思想的、理論的な研究
第 2 期 (1999年度～ 2003年度)	第 1 期の内容に加えて以下の領域の発展 ・子ども・若者の臨床的問題に関する研究 ・発達援助専門職の実践とその支援に関する臨床的研究 ・臨床教育学の探求
第 3 期 (2004年度～ 2010年度)	第 1 期、第 2 期に加えて以下の領域の発展 ・発達障害児者支援や地域連携の課題の追求、成人精神医学近接領域の研究 ・学生の相談、心的外傷に関する研究 ・若者自立支援の研究
第 4 期 (2011年度～ 2014年度)	第 1 期～第 3 期に加えて以下の領域の発展 ・臨床心理学講座の設置に伴う臨床心理士養成
第 5 期 (2015年度～ 2016年度)	大学院組織の再編により松田教員が「障害者臨床心理学」ゼミを開講し、精神障害をもつ人々の支援などを中心に研究・教育を進める。間宮の定年退職と後任人事凍結のため、2017年度以後は渡辺教員が「教育臨床心理学ゼミ」を担当し、学部の「教育臨床心理学講義」は廃止。

2-2. 教育臨床心理学ゼミの変遷

ゼミ開講（第 1 期）

1994（平成 6）年 4 月、横湯は単独で、後に「教臨ゼミ」と呼ばれることになるゼミを開講した。『平成 6 年便覧』には、「テーマ：学校における適応障害」、「概要：登校拒否・不登校を中心とする学校における適応障害の解決に向けた総合的研究を行っている」とある。他のゼミからの移動を含めて当初 30 名ほどの希望があったといい 12 人が所属した。この希望人数の多さは、その後も続くが、それは、1990 年代の内外の歴史的社会的事情を反映していたのであろう。この時、はじめてのゼミ生となった学生は次のように語る⁽²³⁾。

教育をやりたいか、または、食い詰めた人が流れてきた感じ。バブルが終わり、ソ連が崩壊した直後だった。教育学部は成績が高くないでも行けるし、がつつやらなくてもついて行けそうだと。人間臭いものを求めている学部だった。他のゼミがなぜ人気なかったかということも考えてみなくてはならないと思う。このゼミで学んだことは、子どもたちの世界をどう理解するか、その人たちの生活世界、生活主体としての彼らをどう理解するのか。その視点は、自分が少ししかかわった医療とは一線を画していた。共感…、ロジャーズとも違うような。子どもをどう理解するかということだった。

1995（平成7）年度に卒業した一期生12名の卒業論文題名は次の通りである。大学の卒業論文は時代を反映するといわれるが、1990年代に、学生は人間と社会を考えていた。

「人間の有限性についての一考察—フランクフルを読み直す」

「性自認についての性心理学的検討」

「外国人子女の地域社会：学校への適応—イランの少年の事例研究を中心に」

「『ローラ叫んでごらん』から」

「いじめから死に至るプロセスについての研究」

「児童虐待防止についての基礎的研究」

「学校カウンセラーの専門性と独自性に関する一考察」

「自殺の背景とその防止—森田療法を通じて」

「教師がカウンセラー的役割を兼務することについての一考察」

「青年期後半における自己確立について」

「思春期の自立と依存の関係をめぐる一考察」

「おとなに内在する子ども性とその在り様をめぐって」

なお、1995（平成7）年度から2002（平成14）年度までの卒業論文及び1998（平成10）年度から2002年度までの修士論文の著者名と題目は、教育臨床心理学研究グループ発行の『教育臨床心理学研究』第5号（2003年3月発行）にすべて掲載されている。

翌年、1995（平成7）年のゼミは、『便覧』によると次のようである。教官は「横湯園子、田中孝彦、伊藤亜矢子、大学院M.C. 小河原禮子」。テーマは、「臨床心理学をいかに学校・教育現場の諸問題分析を行いながら、人間関係の悪循環を断つための総合的研究を行っている」とある。96（平成8）年のゼミは、教官は上記3名。院生も同じく1名。テーマは「教育臨床心理学の課題と方法」で、概要は「新しい学問である教育臨床心理学の方法を、以下の研究を総合的に進めながら、明確にしようとしている。その概要の項目については先述表1の第1期を参照されたい。

1998（平成10）に伊藤に代わって葛西（松田）康子教員が助手に採用され、修士課程の大学院生は7名に増えている。テーマ・概要は1997年から変わっていない。

1999（平成11）年、横湯に代わって間宮が着任。テーマ、概要は変わっていない。2000年3月に発行された教育臨床心理学講座の『1999年度・教育臨床心理学研究紀要創刊号』には、「Ⅱ小特集：学校カウンセリングの課題」があり、小野博美著「学校という場で学んだこと—先生方との関わりから」と熱田ゆり著「アメリカにおけるスクールカウンセリング」を掲載。さらに第Ⅲ部には、安原淳子著「いじめ・不登校児についての事例研究」、天岡優子著「現代学校における養護教諭の仕事」、土永葉子著「阪神大震災における精神科医療の展開」、金子裕美著「思春期の子どもと教師の関係についての考察」、村澤和多里著「主観的体験からみた対人恐怖状況」の5本が寄稿されている。

この時期、横湯は『子どもの心の不思議』（1997年）、『いじめ、不登校、暴力：子どもたちの悲鳴に耳を傾けて』（1997年）などの単著の刊行のほか、堀尾輝久ほか編『講座・学校』シリーズ本に多くの論考を寄せて教育臨床心理学を模索していた。また、田中は『保育の思想』（1998年）、『子どもの人間形成と教師』（1998年）などの単著を出版し、共編著の『中学生の世界』のシリーズ本に寄稿しており、全国各地での講演活動を旺盛に手掛けて教師・父母とつながり臨床教育学の構築を志向して尽力していた。この第1期の教育臨床心理学ゼミの主題は「学校

と思春期」「子どもの声を聴く」というものだったと考えてよいだろう。

第2期

横湯の後任として間宮が着任。グループの研究紀要『教育臨床心理学研究創刊号』で、田中は「臨床教育学への接近」を、間宮は「教育臨床心理学研究の展望—教育臨床とアンリ・ワロンの臨床的研究」を、葛西（松田）は「臨床家として研究に取り組むとき—事例を扱う場合の倫理的配慮とは」を寄稿している。教育臨床心理学ゼミの第2期に向けて、構成する教員のそれぞれが「研究・教育の展望」を述べたものだった。この論文で、田中は、第1期を総括して、これから「臨床教育学を名のる」ことと「臨床教育学の必然性」を論じた。

子どもや親・教師と対話し、生の声を「聴きとる」という方法を深め、彼らの生活や内面形成の過程を記録し、それらを吟味し、そこから、日本の民衆が子ども観・発達観・学習観・教育観を練り上げていく。そのころ、そんな教育思想研究を開拓できないかと考えるようになっていた。（中略）教育と臨床と心理をどう結ぼうとしているのか、教育学において実践という概念のほかに臨床という概念が必要かといった疑問がわいた。同時に、これは、子ども・父母・教師により直接的にかかわり、民衆の子ども観・教育観の問題をより具体的に研究する機会、精神医学や臨床心理学の分野の人々とともに考えるよい機会となるかもしれないという期待も抱いた。

この田中の「宣言」は、『生き方を問う子どもたち』などで北大グループの研究成果として紹介されている⁽²⁴⁾。広義的教育実践を組み込んだ「教育臨床心理学・臨床教育学」という模索がゼミで新たに始まった。学校教育実践を含むところの臨床教育学の分野が中心だが、子ども・若者の生存・成長を支える新しい学問領域をめざした。新規に参加した筆者は、24年間にわたる地域医療を掲げる総合病院からの転職であったので、この田中の臨床教育学の提起を新鮮に受けとめた。その一方で、教育学と心理学の研究方法の差異の問題と学校教育は未知の世界であるという不安が混在していた。ゆえに、具体的には、教育相談、生活指導、若者自立支援、臨床心理学史からのアプローチをもって研究・教育に加わった。松田は、精神障害者・発達障害者のケアリング論を深めていた。3教員参加の学部ゼミで、「恵那の生活綴方教育」を掘り下げた年、筆者も学生を伴って恵那に調査に赴いた。また、ゼミとして「上ノ国町教育実態調査（2000年）」を行った。この時、現地調査の意義を確信し、その後の筆者の研究に大きな影響を与えた。この時期のゼミの主題は「子どもの声を聴く」と「自己の形成」であったといってよいだろうと思う。卒業論文で地域の学校に入って子どもの声を聴くという研究が相次いだ。

この時期、筆者は学校を取り巻く環境に関する地域調査を開始し「教育臨床研究における地域調査」⁽²⁵⁾、「地域の再生と学校—北海道檜山の調査から—」⁽²⁶⁾、編著『檜山・上ノ国町地域調査報告書』⁽²⁷⁾を執筆している。また、人間発達援助職の専門性研究の観点から、「心理臨床家の自己一致—児童臨床と良寛研究—」⁽²⁸⁾、「子どもの医療と生涯発達の支援」⁽²⁹⁾を公刊している。さらには、教育臨床心理学・臨床教育学の思想史・理論研究の観点から研究グループ紀要第2号で「特集：甦るワロン」を編集した。臨床教育学の構築を志向した研究グループの一員としての研究姿勢の転換のつもりがあった。筆者に限って言えば、長い間、発達相談、カウンセリング、心理療法、臨床心理査定などの業務を行っていたものが容易に臨床教育学の構築に貢献できる

わけはなく、研究の方法や理論的な開発が求められた。グループ紀要創刊号への寄稿論文の冒頭に記したように、強いて語れば「橋を架ける」(I wish to be a bridge across the Pacific)と述べた新渡戸稲造の心境であった。

しかし、田中は2003年3月に転出したので、2003年度は残る2名でゼミを運営した。その頃、独立行政法人への移行に伴う大学院改組の議論が激しく行われ、従来の「乳幼児発達臨床センター」の改編を睨んだ議論があり、後任人事で精神科医師を採用することとなった。

第3期

2004年4月に赴任した精神科医・田中康雄教授は、「臨床教育学」担当教員として教育臨床心理学ゼミに所属し学生・大学院生の教育を担った。ゼミでは、「心理臨床・発達支援・教育臨床の様々な課題に関心を寄せ」、「心理臨床・医療・福祉など、ケアの場におけるその回復・支援について」の研究・教育が進んだ。田中は、2006年から、教育組織としての教育臨床心理学ゼミに在籍のまま、《子ども発達臨床研究センター》の専任教授を務め大きな共同研究を組織した。特別支援教育の時代を迎えて東奔西走の活躍があった。発達障害、地域支援などに関する多数の著作がある。そうした専門領域からの教育臨床心理学と臨床教育学への貢献は高い質を誇った⁽³⁰⁾。学生、大学院生によるゼミも多層の構成になり、松田による研究方法の開拓もあり教育臨床心理学ゼミから発信する障害児者・家族の支援に関する研究の幅と量が飛躍的に高まった。特筆してよいことは、児童精神科医の田中がグループに参加したことにより、児童虐待に関する研究がゼミの主要研究テーマとして定着したことである。虐待やいじめに関する心的外傷研究が行われた。筆者は、2005年から北海道子どもの虐待防止協会代表を務め地域の児童虐待防止活動にちからを注いできた。また、留学生の協力を得て、青少年相談支援が進展しつつあった韓国の実態調査を行い専門職同士の相互交流にも力を注いだ。

2010年から、臨床心理士養成にかかる臨床心理学講座の設置を目途に渡辺教員が加わり、「青年・学生の相談」、「心的外傷」に関する臨床心理学的研究もはじまった。

第4期～第5期

2011年4月から教育臨床心理学研究グループの教員は大学院臨床心理学講座に所属し、臨床心理士養成に特化した教育を担うことになった。ゆえに、大学院では従来の臨床教育学的な研究を行うことから距離を置かざるをえなくなったが、学部では教師や一般職を志望する学生が在籍し第1期以来の研究・教育の内容が継続されている。

この時期に、教育臨床心理学ゼミから博士学位論文が5本提出されている。それらは、以下のようなものである。

小泉径子「子どもの虐待と認知に関する研究—発達障害的な特徴に着目して—」

菊池浩光「単回性トラウマティック・ストレス受傷者のresilience発現を促進・阻害する諸要因の研究」

高品孝之「生徒の衝動性発現の予測化と学校資源を用いた支援」

木谷岐子「体験としての自閉症スペクトラム障害—成人期を生きる当事者の『パーソナリティ(personnalité)』の発展に着目して—」

村澤和多里「『ひきこもり』についての理解と支援の新たな枠組みをめぐる—心理・

社会的な視点からの探求―

これらの論文の題目と内容は、四半世紀にわたる教育臨床心理学ゼミの研究・教育の内容の蓄積を代表するものになっている⁽³¹⁾。

さいごに

わが国は、未曾有の少子高齢化社会に突入したのではあるけれども、未来を創造するのはいつの世においても子ども・若者である。今後も、北大教育学部・教育学院の全体として、成長・発達に困難を抱える子ども・若者の教育と自立支援に関する研究の伝統を絶やすことなく研究・教育が発展することを期待する。

〔注〕

- (1) 市澤豊「戦後北海道の精神遅滞児教育成立期における特殊教育論―北海道大学教育学部『特殊教育講座』の成立過程の検討と城戸構想試論」平成10年度北海道大学大学院修士論文、1999年
- (2) 教育学部庶務掛作成の教授会資料による。手書き書類が大半を占めている。2018年2月16日、5月30日閲覧。労を取られた白川孝子、片山織江庶務担当職員に謝意を表したい。
- (3) 城戸幡太郎「これからの教育研究のあり方―臨床教育学の研究を提唱する」『総合教育技術』第16巻第12号、1962年、pp.40-43.
- (4) 学校教育に関する研究が抜けていること、学校教育を教育学研究の中心領域とみなした場合、北大教育学部の研究体制では「穴が開いている」ことを指摘している。
- (5) 市澤豊『戦後発達障害児教育実践史』明石出版、2010年。第2章が「北大教育学部特殊教育講座の成立と役割」で、第1節「特殊教育講座の成立と変遷」、第2節「特殊教育講座の活動とその役割」。教育学部創設当時の貴重な資料が提示されている。また、市澤豊「新天地で―北海道大学時代」『シリーズ 福祉に生きる 60 奥田三郎』大空社、2011年、pp.185-245. にも「北大教育学部特殊教育講座の創設」がある。
- (6) 1962（昭和37）年特殊教育講座卒業の元北海道教育大学旭川校教授伊藤則博氏（当時札幌学院大学）へのインタビューがある。「初期のことはあまりよくわかりません」と仰せであった。間宮正幸「今日の人間発達科学と発達教育臨床の研究」『北海道大学大学院教育研究科紀要』第100号、2007年、pp.3-24. に全文掲載。
- (7) 奥田資料を市澤が保管・管理してきたが、現在は、北海道遠軽町の北海道家庭学校に寄贈されている。
- (8) 無署名ながら市澤によれば用語・用字の点から山本普助手の一文とのことである。『北海道大教育学部・學報』第1号、p.1. なお、これは市澤（2010）に全文掲載、p.287。
- (9) 高橋裕子「明治期および大正期の学校衛生」日本学校保健学会編『日本学校保健学会50年史』第1章第1節、2004年、pp.1-5.
- (10) 岩原拓「学校衛生」、城戸幡太郎ほか編『教育学辞典Ⅰ』岩波書店、1936年、pp.277-278. ここには「学校衛生の内容」として10領域があげられている。また、岩原拓「学校衛生」が『岩波講座 教育科学 第13冊』に収録されている。1932年、pp.3-45.

- (11) 瀧澤利行「終章 養生はどこへ」『養生の楽しみ』大修館書店, 2001年, p179.
- (12) 瀧澤利行「結章 再考・養生とは何か」『養生論の思想』世織書房, 2003年, pp.291-300.
- (13) 瀧澤利行「終章 養生はどこへ」『養生の楽しみ』大修館書店, 2001年, p.184.
- (14) 間宮正幸「教師のユーモア精神と養生思想」『教育』797号, 2012年, pp.13-20. ここで教師のメンタルヘルスを養生論の観点から論じた。
- (15) 間宮正幸「時代に応える臨床心理発達相談—日本の先達, 城戸・留岡・奥田からの伝言」『子ども発達臨床研究』第11号, 2018年, pp.41-51.
- (16) 奥田三郎「臨床心理学における“人”の問題」『北海道大学教育学部紀要』第13号, 1967年, pp.3-41.
- (17) 大泉溥編『日本の子ども研究』第8巻「奥田三郎の子ども研究と治療教育方法論」クレス出版, 2009年
- (18) 奥田三郎「北大幼児園が開かれた」『北海道大学教育学部・學報』第2号, 1952年, p.3.
- (19) 北海道大学125年史編集室編『北大125年史 通説編』北海道大学, 2003年, p.395.
- (20) 諏訪望・三宅和夫編著『乳幼児の発達と精神衛生: 子どもの成長を促進するために』川島書店, 1976年
- (21) 奥田三郎「教師の精神衛生」『北海道大学教育学部・學報』第2号, 1952年, p.2.
- (22) 奥田三郎「教師の心理」奥田三郎『教育心理』北海道各種学校連合会, 1965年, 文光社, (大泉溥編『日本の子ども研究』第8巻「奥田三郎の子ども研究と治療教育方法論」クレス出版, 2009年, pp.404-458. 引用は, p.452.)
- (23) 教育臨床心理学ゼミ一期生, 村澤和多里氏と山本創氏の対談。2017年11月26日, 附属子ども発達臨床研究センターにて。
- (24) 田中孝彦「臨床教育学を創る」『生き方を問う子どもたち』岩波書店, 2003年, pp.204-232. この章の(1)に「北海道大学における試み」がある。
- (25) 間宮正幸「教育臨床研究における地域調査」『教育臨床心理学研究』第3号, 2001年, pp.12-20.
- (26) 「地域の再生と学校—北海道檜山の調査から—」『生活指導研究』No.18, pp.78-92.
- (27) 間宮正幸編著『檜山・上ノ国町地域調査報告書』北海道大学, 2004年, 全85頁
- (28) 間宮正幸「心理臨床家の自己一致—児童臨床と良寛研究—」田畑治監修『援助の諸領域』ナカニシヤ, 2000年, pp.221-230.
- (29) 間宮正幸「子どもの医療と生涯発達の支援」田畑治・金井美恵子・森田美弥子編『臨床実践の知』ナカニシヤ, 2003年, pp.27-38.
- (30) 田中康雄元教授の編著作は多数に及ぶ。北大在職期の代表的な編著として筆者は『軽度発達障害: 繋がって生きる』金剛出版, 2008年, 『支援から共生へ』慶應大学出版会, 2009年, 編著『児童生活臨床と社会的養護—児童自立支援施設で生活するということ』金剛出版, 2012年, の3点をあげたい。これらの題名が田中の精神医学, 人間発達援助論を表わしている。北大の教育臨床心理学・臨床教育学の構築に大きく貢献していただいた。
- (31) 博士学位論文の内容の一部は本紀要に寄稿した各自の論考に反映されている。